

飼育経験と苦手意識が保育学生の飼育したい生き物の選択に与える影響

上原 隆司

1. はじめに

子どもは自然の中で身近な小さな生き物を観察をしたり採集したりする中で、自然の美しさや生命の不思議さに触れ、また保育室の中で生き物を飼育してふれあうことで、命の尊さを学び、小さな命を飼育する責任感を育むことができると期待される。そのような目的で生き物の飼育を取り入れている保育園・幼稚園は多く、幼稚園を対象に行ったある調査では94.7%の幼稚園で何らかの動物が飼育されていた⁽¹⁾。園の中で飼育される動物はウサギなどの哺乳類からニワトリやインコなどの鳥類、キンギョなどの魚類、カメなどの爬虫類、カエル（オタマジャクシ）などの両生類、カブトムシなどの昆虫類など多様で、その他にもカタツムリやダンゴムシなどの小さな生き物もよく飼育されている^(1,2)。その中でも子どもたちが興味を持って自分たちで捕まえてくる小さな生き物は、子どもたちに「ムシ」と呼ばれ保育室でもよく飼育されている⁽²⁾。子どもたちに好まれる小さなムシは、寿命も長くないものが多い。優しく触れないと潰れてしまうような儚い命であるが、生命のサイクルを観察でき、生き物の死にも触れることができるという点で、このような小さなムシは子どもたちのための生きた教材としても優れている。しかし子どもたちに好まれる一方で、ムシが苦手であるという幼稚園教諭や保育士は多い。保育者や保育者養成校の学生を対象にした調査では虫嫌いの割合が7割を超えるという結果がいくつか報告されており^(3,4)、幼稚園教諭と保育士を対象に行った調査で「自分のクラスでムシ類を飼育していない」と11%が回答した⁽⁵⁾。しかし一方で養成校の学生は、保育者として働き始めたら自分の苦手な生き物であっても子どもたちにふれあう機会を与えたいと消極的ながら考えている⁽⁶⁾。そのような保育者が気持ちよく働けるようにするためにも、保育士養成校でこの虫嫌いをどのように解消するかということを考えていく必要があるだろう。

ムシは嫌いだが、他の生き物であれば苦手ではないという保育者もいる。子どもが捕まえてくる生き物は小さなムシ類が多いが、保育者が苦手な生き物を避けて子どもたちに生き物とのふれあいの機会を与えることもできる。そこで本研究では、保育士養成校の学生が就職後に飼育したい動物を分類ごとに分けて調べ、その生き物への苦手意識があるかどうか、またその生き物の飼育経験があるかどうかを同時にアンケートによって調べた。その結果から、飼育経験が苦手意識の有無に影響するかどうか、また就職後に子どもたちと一緒に飼育したいと考える生き物に、保育者を目指す学生自身の飼育経験と苦手意識が影響しているかどうかを分類ごとに調べた。

2. 方法

これまでの飼育経験と現在の生き物への苦手意識が分類群ごとにどのように異なるかを調べるため、2019年12月に名古屋短期大学保育科の学生を対象に本稿末に載せたアンケート用紙を用いてアンケート調査を行った。調査の結果に影響しないよう、本調査の内容とは無関係な科目の受講者を対象とした。また、保育科の学生の回答のみを利用するため、質問用紙には学科名を選択できるようにし、さらに質問3は保育科の学生のみ回答するように指示した。その結果、保育科1年生99名の女子学生からの回答を得た。

質問1ではこれまでの飼育経験を、質問2ではそれぞれの分類群への苦手意識があるかどうか調査するため「触ることができるかどうか」という質問で答えてもらった。また飼育経験や現在の苦手意識が就職後の園での飼育の希望につながっているかを調べるために、質問3では将来子どもたちと一緒に飼育したい生き物について答えてもらった。質問1-3はすべてa. 哺乳類、b. 鳥類、c. 魚類、d. 爬虫類、e. 両生類、f. 昆虫類、g. その他の小さな生き物から複数回答可能な形で答えてもらうようにした。子どもに限らず、近年の保育学生においてもこれらの分類を正しく理解できていない者も少なくない⁶⁾ため、それぞれの選択肢にはイメージがしやすいようにいくつかの生き物の名前を例として添え、その分類群の中でひとつでも該当するものがあれば丸を付けてもらった。

各質問項目について分類群ごとに丸を付けた学生の人数と割合を集計した。質問項目間の影響を調べるにあたっては、任意の2つの質問の間で分類群ごとにクロス集計し、Fisherの正確確率検定を行った。また質問4で答えてもらった自由記述については、答えてもらった内容を大まかに分類して集計した。

3. 結果

表1は各質問への回答でa-fの選択肢に丸を付けた学生の割合である。質問1の「飼育した経験があるもの」では魚類、哺乳類、昆虫類の順に多い。回答者は全て女子学生であるが、半数以上の学生が昆虫の飼育経験を持っている。一方で、鳥類・爬虫類・両生類の飼育経験がある者は10%台とさほど多くはない。質問2の「触れることのできるもの」では哺乳類に約91%の学生が丸を付けたのに対して、両生類と昆虫類では触れることのできる学生が半分に達していなかつ

表1 選択した学生の割合 (N=99)

回答	質問1 飼育経験	質問2 触れる	質問3 希望
a. 哺乳類	54.5%	90.9%	60.6%
b. 鳥類	11.1%	65.7%	37.4%
c. 魚類	64.6%	53.5%	62.6%
d. 爬虫類	13.1%	56.6%	27.3%
e. 両生類	11.1%	36.4%	20.2%
f. 昆虫類	51.5%	45.5%	36.4%
g. その他	35.4%	57.6%	29.3%

表2 選択された個数の分布 (N=99)

回答 個数	質問1 飼育経験	質問2 触れる	質問3 希望
0個	12.1%	4.0%	8.1%
1個	19.2%	12.1%	18.2%
2個	22.2%	19.2%	24.2%
3個	21.2%	9.1%	24.2%
4個	16.2%	7.1%	8.1%
5個	6.1%	14.1%	6.1%
6個	2.0%	11.1%	6.1%
7個	1.0%	23.2%	5.1%

た。質問3の保育園や幼稚園で子どもたちと一緒に飼育してみたい生き物では、哺乳類と魚類に50%を超える学生が丸を付けた。爬虫類や両生類、ダンゴムシなどの小さな生き物については飼育の希望を持っている学生が20%台とそれほど多くなかった。

表2は各学生がそれぞれの質問で丸を付けた回答の個数の分布を表している。中には7つすべての分類群で飼育経験があるという学生もいたが、1つも飼育した経験がないという学生も12.1%もいた。触ることができるかどうかについては23.2%の学生が7つの分類群のどの生き物にも触ることができるという回答であったが、残りの76.8%の学生には触れることのできない苦手意識を持った生き物があり、4%の学生は触れることのできるものが1つもなかった。また質問3の回答を見ると8.1%の学生は子どもたちと一緒に生き物を飼育してみたいという希望が全くなかった。しかし、回答者のうち91.9%が何らかの生き物を子どもたちと飼育したいと考えており、7つの分類群すべて飼育してみたいという学生も5.1%いた。

表3 分類群ごとに見た飼育経験の有無とその生き物に触れるかどうか

哺乳類	触れる		総計
	○	×	
飼育○	52	2	54
飼育×	38	7	45
総計	90	9	99
p = 0.0448 *			
両生類	触れる		総計
	○	×	
飼育○	10	1	11
飼育×	26	62	88
総計	36	63	99
p = 0.0001 ***			
鳥類	触れる		総計
	○	×	
飼育○	9	2	11
飼育×	56	32	88
総計	65	34	99
p = 0.1977			
昆虫類	触れる		総計
	○	×	
飼育○	31	20	51
飼育×	14	34	48
総計	45	54	99
p = 0.0015 **			
魚類	触れる		総計
	○	×	
飼育○	41	23	64
飼育×	12	23	35
総計	53	46	99
p = 0.0042 **			
その他	触れる		総計
	○	×	
飼育○	28	7	35
飼育×	29	35	64
総計	57	42	99
p = 0.0007 ***			
爬虫類	触れる		総計
	○	×	
飼育○	11	2	13
飼育×	45	41	86
総計	56	43	99
p = 0.0259 *			

*** p < 0.001

** p < 0.01

* p < 0.05

質問1-3で選択した内容がどのように影響しあっているかを調べるため、表3-5では各質問の回答をクロス集計でまとめた。表3は各分類群ごとに飼育経験の有無（質問1）と触れるかどうか（質問2）の回答をまとめたものである。飼育経験が現在もその生き物（とそれに近い動物）

に触れることができるかどうかに影響しているかを調べるために Fisher の正確確率検定を行い、表中に分類群ごとに計算した片側検定の結果の p 値を示した。この結果、鳥類以外では飼育経験の有無によって現在触れることができるかどうかの割合に有意な差が出た ($p < 0.05$)。鳥類については飼育経験のある者が 11.1% と少ないが、飼育していなかった 88 名のうちで触れることのできる者が 56 名と、飼育経験のない者のうちの 63.6% は苦手意識があるわけではない。他の分類群では飼育経験の有無によって触れるかどうかに有意差が出たものの、魚類と昆虫類については飼育経験があるにも関わらず現在は触ることができないという人が 4 割近くいた。これらについては飼育経験がない学生の苦手意識が強いだけでなく、50% を超える飼育経験がある学生のうちの一定数が大人になるにつれて苦手意識を持つようになったということになる。

表 4 は飼育経験の有無（質問 1）と園での飼育希望の有無（質問 3）の回答をまとめたものである。両生類、昆虫類、その他の小さな生き物については飼育経験の有無によって将来の飼育希望の有無に有意な差が出た。これらはどれも「触れない」（63.6%，54.6%，42.4%）、「飼育したいと思わない」（79.8%，63.6%，70.7%）と回答した学生の割合が高く、学生の苦手意識の強いと思われる動物であった。飼育経験があったり、元々好きであったりしないと、子どもたちと飼育するにもハードルが高くなると考えられる生き物のグループである。

表 4 分類群ごとに見た飼育経験の有無と園での飼育希望の有無

哺乳類	希望		総計
	○	×	
飼育○	34	20	54
飼育×	26	19	45
総計	60	39	99
$p = 0.3744$			
鳥類	希望		希望
	○	×	
飼育○	4	7	11
飼育×	33	55	88
総計	37	62	99
$p = 0.6089$			
魚類	希望		希望
	○	×	
飼育○	44	20	64
飼育×	18	17	35
総計	62	37	99
$p = 0.0692$			
爬虫類	希望		希望
	○	×	
飼育○	6	7	13
飼育×	21	65	86
総計	27	72	99
$p = 0.0988$			
両生類	希望		希望
	○	×	
飼育○	5	6	11
飼育×	15	73	88
総計	20	79	99
$p = 0.0421 *$			
昆虫類	希望		希望
	○	×	
飼育○	27	24	51
飼育×	9	39	48
総計	36	63	99
$p = 0.0004 ***$			
その他	希望		希望
	○	×	
飼育○	18	17	35
飼育×	11	53	64
総計	29	70	99
$p = 0.0005 ***$			

*** $p < 0.001$

** $p < 0.01$

* $p < 0.05$

次に表5ではその生き物を現在触ることができるかどうか（質問2）と園での飼育希望の有無（質問3）の回答についてまとめている。ここでは全ての分類群について飼育経験の有無によって飼育希望の有無に差が出ていた（ $p < 0.01$ ）。

表5 分類群ごとに見たその生き物を触れるかどうかと園での飼育希望の有無

哺乳類	希望		総計
	○	×	
触れる	59	31	90
触れない	1	8	9
総計	60	39	99
$p < 0.0023^{**}$			
鳥類	希望		総計
	○	×	
触れる	34	31	65
触れない	3	31	34
総計	37	62	99
$p < 0.0001^{***}$			
魚類	希望		総計
	○	×	
触れる	41	12	53
触れない	21	25	46
総計	62	37	99
$p = 0.0011^{**}$			
爬虫類	希望		総計
	○	×	
触れる	23	33	56
触れない	4	39	43
総計	27	72	99
$p = 0.0003^{***}$			
両生類	希望		総計
	○	×	
触れる	17	19	36
触れない	3	60	63
総計	20	79	99
$p < 0.0001^{***}$			
昆虫類	希望		総計
	○	×	
触れる	26	19	45
触れない	10	44	54
総計	36	63	99
$p = 0.0001^{***}$			
その他	希望		総計
	○	×	
触れる	25	32	57
触れない	4	38	42
総計	29	70	99
$p = 0.0001^{***}$			

*** $p < 0.001$

** $p < 0.01$

* $p < 0.05$

表6では自由記述で答えてもらった「子どもたちと一緒に飼育してみたい理由」（質問4）をおおまかに分類し、まとめたものである。「生き物に対する責任や命の大切さを学んでほしい」「生き物に興味を持ってほしい」と子どもたちの成長を期待する回答が多い一方で、「自分が好き」「小さい頃に飼っていたから」「自分も触れるから」という自分自身の側からの理由も一定数の回答があった。表内にまとめられていないその他の回答では「複数飼育できる」「家庭で飼育することのないものに触れてほしい」「協力して飼育することで仲間意識が育つ」「哺乳類のぬくもりを感じてほしいが、死んでしまったときに悲しい思いをするので選択しなかった」などがあった。

表6 質問4の自由記述の回答

飼育してみたい理由	回答数
生き物に対する責任・命の大切さを学んでほしい	18
生き物に興味を持ってほしい	11
飼いやすい	10
子どもが好きな生き物	6
自分が好きな生き物	6
小さい頃に飼っていた	6
園でよく見る	6
自分も触れる	4
かわいい	4
子どもに危険がない	3
その他	4

4. 考察とまとめ

今回の調査の対象となったのは短大保育科の1年生で、まだ専門科目である領域「環境」に関わる授業を受けていない学生である。それでも表6から読み取れるように、子どもたちと一緒に生き物を飼育したい理由として多く挙がるのは子どもたちの成長を考えた回答であった。一方で、「自分が好きな生き物だから」や「自分も触ることができるから」という回答も見られた。さらに表5ではっきりと見られたように、自分が触ることができる生き物とできない生き物で、園で飼育したいかそうではないかという回答に明らかな差が見られた。保育者になることを希望する学生は子どもたちに生き物にふれあってそこからいろいろなことを学んでほしいと思いながらも、どのような生き物を飼育するかについては自身の得意／不得意に応じて選択したいという気持ちが見られる。

子どもたちと一緒に飼育したい理由として「小さい頃に飼っていたから」というように答えた者も6人いたように、自身が育て方を知っている生き物も飼育動物として選択される対象となるだろう。表4では両生類、昆虫類、その他の小さな生き物などの学生が苦手意識を持ちやすい生き物については、飼育経験のある学生とそうでない学生との間で、子どもたちと飼育したいかそうでないかという回答に違いが出た。両生類については「水中でも陸上でも生活できるカエルなどの生き物に興味を持ってほしい」という学生もいた。元々興味がある学生や、飼育する中で面白さを発見した学生は子どもたちにもその経験をしてほしいと思う一方、苦手意識のある学生はそのような生き物を保育教材としての対象から外してしまう。保育者が苦手な生き物を無理に飼育する必要はないが、苦手意識のある動物ばかりだと、子どもたちが生き物に接して興味を持つ機会を保育者が作ってあげられないということもあるだろう。アンケート回答者の60.6%が哺乳類を子どもたちと一緒に飼育してみたいと答えたが、多くのものが好きだと回答する犬や猫などは園で飼育することには問題も多く、「(哺乳類は)死んでしまったときに悲しい思いをする」と回答した学生もいた。生き物の死に触れることで命の大切さを子どもたちが学ぶことも考える

と、子どもたちの責任で飼える昆虫などの小さな生き物を飼育することが望ましい。

表3からは小さい頃の飼育経験と現在の苦手意識の関係を読み取ることができるが、鳥類以外では飼育経験がない場合はある場合に比べて現在も触ることができないものが多いという結果になっている。動物の飼育を経験する機会があるかどうかについては家庭の環境や家族の意思もあるため、個人の意志だけでは決められない。そのため、飼育の経験がないからといって必ずしも生き物に対する苦手意識が生じるということではなく、鳥類に見られるように飼育する機会自体がないだけで苦手意識はないということもあるだろう。だが、多くの分類群での解析結果に顕著に現れているように、飼育の経験と現在の苦手意識は無関係ではない。

哺乳類と魚類は質問3で「子どもと一緒に飼育してみたい」の回答率が50%を超えた。これらはどちらも質問1, 2ともに丸が付けられた割合の高かったもので、親しみがあるということが理由として考えられる。一方で爬虫類や両生類、ダンゴムシなどの小さな生き物については飼育の希望を持っている学生が20%台とそれほど多くない。わずかな差ではあるが、昆虫類に関しては飼育経験がある学生が過半数に達しているのにも関わらず、現在触ることができない学生の方が過半数である。魚の場合は飼育していても直接触ることは少ないかもしれないが、昆虫の場合は子どもの頃に飼育していた経験があれば直接手にとっていたことであろう。つまり昆虫については子どもの頃に触ることができたにもかかわらず、大人になると触れることができなくなるとことが起こっていると考えられる。過去に行われたアンケート調査では虫嫌いの割合は幼稚園児で34%であったのに対して、保育者養成校の女子学生では76%であった⁽³⁾ ことからそのことが窺える。

今回のアンケートではそれぞれの動物に触れない理由については尋ねていないが、昆虫を触ることができないという学生では鱗粉などが手に付着することを嫌うことが多い。別の研究では不快感、危害、予測できない行動を昆虫に触れない理由として多く挙げた⁽⁷⁾。しかし、大人になった後でも、虫への苦手意識は虫とふれあうことや理解を深めることで緩和されるということが保育者を目指す女子学生で報告されている^(7,8)。子どもの頃にふれあった経験がある人の方が大人になった後に昆虫に触れる人が多いが、成長の過程で触れなくなる人も多くいる。虫を嫌いになった時期について調査した研究では、ほとんどが小学生や中学生の時期に嫌いになっていた⁽⁴⁾。だが、虫やその他の生き物への苦手意識は克服可能であり、嫌いだからといってそのままにしておくことは保育者としての自分の幅を狭めてしまう。

苦手意識はいずれかの段階で取り除いておくことが望ましい。表5を見ると、苦手意識と園で子どもたちと一緒に飼育したいかどうかとは、はっきりと結びついている。子どもたちと生き物とのふれあいの機会を作ることのできる保育者を養成するために、養成校では生き物を理解し、ふれあうことのできるような機会の提供が授業内外できると良いだろう。また表4でも見られるように、保育者自身の過去の飼育経験は子どもたちに与えることのできる保育の内容にも影響を与えている。これは保育者を目指す多くの学生が小さい頃からピアノに慣れ親しんでおり、自信を持って子どもたちに曲を弾いてあげることができるのと同様である。保育者自身が子どもの頃から生き物に触れていることは、子どもたちに同じように生き物とのふれあいの機会を多く与えてあげることにつながる。子どもの頃でも大人になってからでも、どこかのタイミングで生き

物とふれあう経験を持つことで生き物への苦手意識を克服できることを知っておくことは、養成校の教員にとっても学生にとっても重要である。

だからといって嫌がる子どもに無理やり虫を飼育させても意味がない。保育者が子どもに興味を持たせるように援助してあげるのと同様、将来保育者になる子どもにも周りの大人が生き物への興味を引き出してあげることが必要である。そうすることで、子どもたちと一緒に生き物を観察したり飼育したりするということを積極的に保育に取り入れる保育者も増えるだろう。そしてそれが、現在は少なくなったと言われる生き物との関わりを子どもたちに持たせ、生命の不思議に対する好奇心や命の大切さ、責任感などといった子どもたちの成長につながっていくだろう。

引用文献

- (1) 遠藤翠、中村陽一、渡邊ユカリ（2002）幼稚園における飼育の実態に関する研究 日本保育学会大会発表論文集 55：440-441.
- (2) 山下久美、首藤敏元（2005）幼稚園・保育園の動物飼育状況と飼育体験効果に関する研究展望 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 4：177-188.
- (3) 柘植純一（1997）幼児と昆虫とのふれあいに及ぼす母親及び幼児を取り巻く環境の影響について 北海道の保育 21：55-59.
- (4) 木村紗帆、野崎健太郎（2016）保育者および教員養成課程の女子学生が虫に抱く意識—虫嫌いの仕組み— 椙山女学園大学教育学部紀要 9：109-119.
- (5) 山下久美、首藤敏元（2003）幼児の動物教材（ムシ類）の提供についての研究 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 2：149-157.
- (6) 平田豊誠、小川博士（2017）幼稚園教諭・保育士志望学生の「虫」と「動物」についての意識調査 佛教大学教育学部学会紀要 16：63-74.
- (7) 田川一希、新井しのぶ、石田靖弘（2018）保育の領域「環境」において、保育者の「虫嫌い」を緩和し、身近な昆虫を保育に活用する方法 中村学園大学発達支援センター研究紀要 9：67-76.
- (8) 柘植純一、行方春香、安井美恵子（2013）幼児が身近な自然と触れ合える環境の整備—幼稚園におけるバタフライガーデンの設置と活用— 環境教育 22(3)：22-29.

（受理日 2020年1月8日）

上原 アンケート用紙

該当するものを○で囲んでください。

学科（保育科・現代教養学科） 学年（1年・2年）

下の各質問に対してabcを○で囲んで回答してください。

質問1. あなたがこれまでに飼育した経験があるものを○で囲んでください。
ただし、「家族が世話をしていただけで近づくことはなかった」というものには○をせず、
自分で世話をした経験や、触れて遊んだことのあるもののみ丸をしてください。

- a. 哺乳類（イヌ、ネコ、ウサギ、ハムスターなど）
- b. 鳥類（インコ、ブンチョウ、ヒヨコなど）
- c. 魚類（メダカ、キンギョ、各種熱帯魚など）
- d. 爬虫類（カメ、トカゲ、ヤモリなど）
- e. 両生類（カエル、イモリなど）
- f. 昆虫類（チョウ、トンボ、カブトムシなど）
- g. その他の小さな生き物（ダンゴムシ、サリガニ、カニ、カタツムリなど）

質問2. 現在のあなたが直接手で触れるもののできるものを選んでください。

括弧内の生き物の中に触られるものと触られないもの両方が含まれている場合、1つでも触れられるものがあればabcを○で囲んでください。同分類内で括弧内に例として挙がっていない生き物が触れる場合も○をしてもらって構いません。

- a. 哺乳類（イヌ、ネコ、ウサギ、ハムスター など）
- b. 鳥類（インコ、ブンチョウ、ヒヨコ など）
- c. 魚類（メダカ、キンギョ、各種熱帯魚 など）
- d. 爬虫類（カメ、トカゲ、ヤモリ など）
- e. 両生類（カエル、イモリ など）
- f. 昆虫類（チョウ、トンボ、カブトムシ など）
- g. その他の小さな生き物（ダンゴムシ、サリガニ、カニ、カタツムリ など）

質問3.（保育科の人のみ回答） 保育者になったとき、保育園・幼稚園などで子どもと一緒に飼育してみたいと思うものがあれば○で囲んでください。

- a. 哺乳類（イヌ、ネコ、ウサギ、ハムスター など）
- b. 鳥類（インコ、ブンチョウ、ヒヨコ など）
- c. 魚類（メダカ、キンギョ、各種熱帯魚 など）
- d. 爬虫類（カメ、トカゲ、ヤモリ など）
- e. 両生類（カエル、イモリ など）
- f. 昆虫類（チョウ、トンボ、カブトムシ など）
- g. その他の小さな生き物（ダンゴムシ、サリガニ、カニ、カタツムリ など）

質問4.（保育科の人のみ回答）1つ前の質問3で○を付けた生き物を飼育したいと思った理由を教えてください。

このアンケートは保育者を指す学生の過去の生き物の飼育経験と現在の生き物への苦手意識を調査する目的で行われています。匿名式となっており、あなたのプライバシーを特定するような項目はありません。正しい回答はアンケートの目的以外には一切使用いたしませんので、正直にお答えください。

アンケートは授業後に提出してください。なお、調査への協力は任意であり、協力しなかったことであなかが不利益を被ることはありません。アンケート調査への回答および用紙の提出によって、本研究への協力について同意したものとみなさせていただきます。

ご協力ありがとうございました。